

# 16世紀の「ルモントランス」について

——ロンサールの『ルモントランス』を通して——

La «remontrance» au XVI<sup>e</sup> siècle:  
À propos de *la Remontrance* de Ronsard

相 田 淑 子

## 要 旨

アンシャン・レジーム期においては、勅令に対応して作成された司法文書であるルモントランス (remontrances parlementaires) が広く知られているが、ルモントランスには制度的に確立された形式だけでなく、様々なタイプが存在し、それらが公にされた際にも「ルモントランス」というタイトルを冠し、「諫言」や「建言」あるいは「忠告」や「訓戒」の意味を有した。こうした多様性を考慮すると、修辞学的アプローチによって感情的な言葉と公的な和解がどのように結びつくかを検討することが可能となる。本稿はその第一歩として、ルモントランスについて考察した後、ピエール・ド・ロンサールの『フランスの民へのルモントランス *La Remontrance au peuple de France*』を具体例として解説する<sup>1)</sup>。

## キーワード

ルモントランス, 16世紀, 宗教戦争, ロンサール

## はじめに

ルモントランス (remontrance) という言葉は、中央大学人文科学研究所の研究チーム (16世紀における「寛容」) で扱ってきた書籍では、陳情や勧告あるいは諫言や建言を意味する文書の意味で使用されている<sup>2)</sup>。動詞 *remontre* から派生したのがこの *remontrance* である。ルクレールの著作

では、現在分詞の *remoustrant* が、16世紀、17世紀のオランダにおけるアルミニウス派とゴマール派の対立において頻出し、諫言派、勸告派あるいは反対派の意味としてアルミニウス派を示す言葉として使われた。当時のオランダ総州に提出された神学の声明である『ルモントランス』(1560年)に由来する。18世紀以前のルモントランスは、フランスに限らずヨーロッパで使用されたようである。

一般にはアンシャン・レジーム期のフランスではルモントランスは「諫言権」として知られる。議会または王室官吏が、民 (*peuple*) の利益や王国の基本法に反すると考えた場合、国王が発行した法律や勅令等に異議を申し立てる権利である。司法的な手続きで、裁判所が異議申し立てを受け、陳述内容を確認し、再調査の要請を国王に出す。王権に対する牽制の手段としてルモントランスの機能がよく知られている。これが非司法の領域へも入り込んで、司法／行政分野の文書とは異なる用途が生み出された。個人から発出されたルモントランスが印刷され、さらに再版されるケースも散見されるようになる。宮廷詩人ロンサールの『フランスの民へのルモントランス *La Remonstrance au peuple de France*』(1563年)もこうした潮流と無関係ではない。相手や目的があつてのルモントランスであるが、ロンサールの忠告や諫言の相手は、ひとりではない。対話の相手(とみなされる存在)が10名を超える<sup>3)</sup>。一方でロンサールの『ルモントランス』の目的ははっきりしている。度を増して激しくなる宗教戦争を早く終わらせるのが目的であった。

## 1 ルモントランスについて

### 1-1 ルモントランスの研究

個々のルモントランスではなく、ルモントランスの形式やジャンルについて正面から扱った研究は、ほとんど存在しないと言ってよい。そもそも

ルモントランスというものを総体として論じることは困難を極める。それでも近年、ポール＝アレクシス・メレ（Paul-Alexis Mellet）が<sup>3</sup>、いくつかの著作で果敢にもそれに挑戦している<sup>4</sup>。

メレはルネサンスを中心にヨーロッパで出版されたルモントランスについての共同研究も取りまとめているが、個人著作のほうでは1560年から1603年の間にルモントランスと題された印刷物700点余り（再版を含む）を対象とした研究成果を発表している。再版を含むとしても驚嘆に値する資料点数である。その全てを前に、メレは求める答えを見つけ出そうとする。序論では、メレがルモントランスに対して抱く多くの疑問がそのまま投げられている。一部を列挙してみる。

- ルモントランスは1560年代から1600年代の他の印刷物とどう違うのか。
- テキストそのものが、どのようにそのジャンルを定義しているのか。
- 作者や出版社はどのような動機に反応しているのか。
- 国王への賛美、忠誠からの行為、権力への挑戦（緊急性と脅威）の接点はどの程度あるのか。
- 統治の手段（トップダウンのルモントランス）という点でも、権力者の選択に影響を与える（ボトムアップのルモントランス）という点でも、何らかの形で効果的だったのか。
- 彼らが伝えた政治的（善政）、社会的（秩序ある社会）、宗教的（キリスト教王国）などの基準は何か。
- 内戦下のフランスについて、彼らはどのように評価しているのか（荒唐、希望等々）。
- 誰が悪いのか（王、民衆、異端者、政治家、外国人）。
- カトリックとプロテスタントのルモントランスの間に違いはあったのか。
- 彼らは暴力の論理に従っているのか、それとも暴力に終止符を打つ必

要性を宣言しているのか。

- 彼らはどのような代表手続きを採用しているのか（委任と代表）。
- なぜ彼らは「苦しむ民衆」、都市と地方の特権、貴族の利益、教会の自由を守ることを目標に掲げたのか。
- 彼らの目的は税の引き下げと正義と平和の回復に限られていたのか。
- 王国の「再興」は、どの程度まで和解（フランス人同士の結合、和合、友好）を必要としたのか。
- なぜ再興は政治的（「公会議の君主制」）かつ宗教的（「真にキリスト教的」なフランス）でなければならなかったのか。

等々。

序論で記された上記の疑問のうち、本論で回答が明示されたり、ほのめかされたものは多いのだが、全ての問題提起に回答することは至難の技である。言説と思想が絡みあうルモントランスの複雑な分析と提示は、筆者のような浅学な読者には正直、理解が追いつかない部分も多かった。一貫した論理をみつけたり、一言でまとめるようなことは本書の性格とは合わないようである。ただ、今までの文学史ではほとんど目立たなかったルモントランスに、照明を当てたという事実は重視されるべきである。事務的な文書と判断される多くの「ルモントランス」でさえ、その全てが乾き切った言説ではないし、複数のルモントランスは宗教戦争の歴史を知る上で大変に興味深い。

残念ながらメレは、本稿であつかうロンサールのルモントランスについて多くを語っていない。メレが対象とした年月とルモントランスの夥しい数を見れば、たとえ詩王と言われたロンサールでも一つだけのルモントランスの発表では、研究書の数行の記述になってしまうのは致し方ない。最終的にメレの意図は「宗教戦争」そのものへの見直しの視点を読者に提示しているようでもあるし、歴史に対して、一石を投じるような見解でもあ

る。

さてフルティエールの辞書（dictionnaire universel de Furetière, 1690）によれば、以下がルモントランス（remonstrance 女性名詞）の古い定義である。

「国王または上位者に対して、その法令または命令の不都合または結果について反省を求めるために行う謙虚な嘆願。議会は、かかる布告について国王を諫めるために大挙して出向いた。」

フルティエールは、ルモントランスはまた「欠陥の警告または是正するためになされる、軽くて誠実なる助言、訂正である」と言い、たとえば母親が慎みを守らない娘を諫める時にも使用する例を出している。

一方で文学関係の辞典ではルモントランスの項目自体が存在しないようである。この状況から、ルモントランスが文学の分野では修辭的なあるいはジャンルのな価値を認められていないと判断される。

## 1-2 ルモントランスの特徴

18世紀までのルモントランスは、口頭による宣言であったり、書きとられたり、さらには印刷されて版を重ねたりしている。たとえば教会や国家に関しては、批判を加え、改革を促進し、現状を改善するための解決策を提案する場合である。時にルモントランスは、相手に寄り添い助言を行い、さらに手厳しい非難まで行う。かなり広い範囲に及ぶ言説が展開される特徴がある。つまり16世紀から18世紀にかけては、ルモントランスは、非難と友好的な助言の中間に位置する談話形式と考えると良いようである<sup>5)</sup>。語る目的は、聞き手を説得することであり、その結果、聞き手が語り手の話を聞く前には同意していなかった事柄を受け入れ、肯定的に行動するよう

に仕向けることである。

日本語には、「忠告」や「勧告」あるいは「訓戒」等々の言葉がある。また「慷慨（こうがい）」という、正義にはずれたことを激しくいきどおり嘆いたり、諫めたりすることを意味する少し古い言葉がある。50年前に出版された『フランス文学辞典』では、ロンサールの1561～63年に作られた一連の詩（ルモントランスを含む）に「時事慷慨詩」という表現が使われているのが興味深い<sup>6)</sup>。また目上の人間に忌憚なく忠告する意味をもつ「諫言」という言葉も、ルモントランスに近似しているように思われるが、訓戒、勧告、時事慷慨や諫言等々それぞれの単語は、ルモントランスの特徴のいくつかを表現するに過ぎないようにも思われる。そのために本稿ではフランス語に合わせてルモントランスという表現を使う。

## 2 ロンサールの「ルモントランス」について

前述の通り詩人ロンサールもルモントランスと題する作品を一編残している。『フランスの民へのルモントランス (*La Remonstrance au peuple de France*)』（『ルモントランス』と略記）である。1550年代に書かれた恋愛を軽やかに歌う詩句、また50年代半ばの『讃歌』での学究的な（哲学、科学、神学等に及ぶ）内容とは相容れない、極めて政治的でさらに政治的中傷文（パンフレット）のような暴力的な詩句を含む作品を、ロンサールはこの時代に作り出した。周知のことだが、当時、パンフレットとよばれる政治的中傷文が、大規模に印刷されていたことと無関係ではない。言葉が武器となり、論戦も悪化していた。

この『ルモントランス』は800行を超える長詩であり、宗教戦争の時代にかかれた「時事慷慨詩」<sup>7)</sup>とよばれる作品の中で最も長く、他と比べて2倍以上の長さをもっている。繰り返すが『ルモントランス』の目的は、宗教的不和を解消し戦争を終結させることである。一般にルモントランスが公

開される文章である以上、その目的は明確であるべきであるという前提がロンサールの作品にもある。

1563年にガブリエル・ブオンから、最初は匿名で出版され、その後、同年に著者の名前で3版続けて出版された。ロンサールの政治的・宗教的言説はこの『ルモントランス』も含め、『当代の悲惨を嘆く論説詩 *Discours des misères de ce temps*』という表題で集められ1567年の全集版で出版される。その後、1571年、1573年、1578年、1587年……と、変更を加えつつも、常にこの表題の下に収められて今日まで出版が続いている。

たしかにルモントランスという性格をもつ作品だが、ロンサールの場合、作品に多様な要素を忍び込ませているので、文学作品として読む場合には、詩人の異なる意図が感じられるかもしれない。

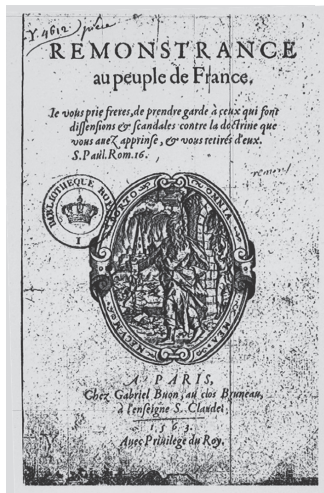
## 2-1 作品の背景

1560年代、すでに宮廷詩人の職にあったロンサールは、即位した幼いシャルル9世に『いともキリスト教的なるシャルル9世王の教育』を贈った。幼いシャルル9世が即位した後のフランスは、摂政役のカトリーヌ・ド・メディシスの宥和政策の実施、宰相ミッシェル・ド・ロピタルの寛容王令の発布（1561年2月）にもかかわらず、新旧両派の対立は悪化の一途をたどっていた。新教に有利な方向（たとえばオルレアン勅令、1561年）に進んだかと思えば、旧教が巻き返し、新旧両派の会談（ボワシーの会談、1561年夏から秋）が複数もたれたが、両派の関係は悪化した。特にプロテスタントの礼拜は禁止されたり条件付きで認められたりを短期間に繰り返し、新教ユグノーは信徒を増やしていた。ユグノーの貴族と、王室を中心としたカトリックの体制側は激しく対立し、残虐行為（ヴァシーの虐殺、1562年3月）と内戦が激化の方向を取る。偶像崇拜を嫌う名目で、イコノクラートも増加した。先述の通り、新旧両派の中傷文書は量産され、言葉も暴力的になる。

宗教戦争（第一次宗教戦争）と言われる内戦，文字通り戦争状態と化したパリで生み出されたのが，この『ルモントランス』である。しかし物理的な暴力と言葉の暴力が常に並行し増幅されるならば，社会はさらに混乱し，人は生きる場所を失うかもしれない。物理的暴力と与しない言葉で，融和や和解のある世界を作り出そうとするのも，ルモントランスの役割である。言葉や文字だけが世界を良いものに変えるなどと言うつもりはないが，良いにしろ，悪いにしろ世界を変える機能があることは確かである。

確認しておかなければならないのは，ロンサールは宮廷詩人として詩作を行い，聖職禄という旧教カトリック側からの俸給を受けていたという事実である。したがって今回のテーマであるロンサールの『ルモントランス』は，その時代背景のみならず詩人の社会的立場と密接に関連する。

1562年末，おそらくその年の12月6日から12月にかけて，コンデ公がパリを包囲していた頃，この『ルモントランス』は，プロテスタントの指導者が捕虜となったドリユの戦い（12月19日）の前に発表されたというのが通





説である。これは匿名で出版されるが、タイトルページには聖パウロの言葉が引用された。現行の版でもみることができる<sup>8)</sup>。「兄弟たちよ、どうか、あなたがたの学んだ教義に対して不和とスキャンダルを引き起こす者たちに注意し、彼らから離れるように（パウロの言葉, *Épître aux Romains*, XVI, 17).」とある（図版参照：Bibliothèque Nationale de France 所蔵）。

## 2-2 『フランスの民 (peuple) へのルモントランス』

——「呼びかけ」を中心に

「論説詩 *Discours*」は、叙事詩や讃歌とともに、プレイヤード派の導入した新しいジャンルとされる<sup>9)</sup>。そのためロンサールが唯一「ルモントランス」と題したこの作品も論説詩のジャンルに含まれる。前述のようにルモントランスを一つのジャンルとする考え方もあり、その場合には、ルモントランスとしての特徴が、作者ロンサールの一連の論説詩に共通する特徴の枠組みから少し自由になり、読解の可能性を広げてくれると思われる。

ロンサールの『ルモントランス』は、12音綴の平韻からなる詩作品である。詩作品ではあるが、発表の仕方（最初は匿名で発表された）は、他のロンサールの作品や当時の一連の論説詩とも異なる。1563年に出版された後は、ロンサール自身の編集によって一連の *Discours* と共に纏められ、再版された。

『ルモントランス』には「献呈の辞」がない。ロンサールの「讃歌」では常に被献呈者が存在し、それが変更されたりする場合もあるが、被献呈者が記されない詩はない。作品の冒頭部分に献呈の言葉が長々と展開される例は枚挙にいとまがない<sup>10)</sup>。表題が示す「民 (peuple) へのルモントランス」の通り「民」に献呈されたのであろうか。そして「民 (peuple)」とは一体誰なのだろうか。21世紀の人が思い描くのは、ある国に属する「普通」の人々といったイメージであろうか。それと重なる部分もあるかもしれない

が、16世紀のロンサールの使用する「民 (peuple)」は、聖職者や貴族や国王を含み、それどころか神話の神々や擬人化された自然さえ対象とする助言、訓戒つまりルモントランスである。確かに庶民や農民そして商人に対して、多少の呼びかけはあるが、その部分は非常に少ない。

ルモントランスの特性として、問いかけたり、諫めたりする「相手」の存在が必要であり、明示されるのは当然である。そしてロンサールの『ルモントランス』においても、「呼びかけ」は冒頭から始まる。だが対象は人間ではない。スケールの大きな呼びかけは、同時に天、海、大地へ呼びかける。自然を意識し、汎神論的、神話的な出だしである。宗教戦争下のカトリックの宮廷詩人という立場よりも、ルネサンス詩人の開放的な視点を強烈に感じさせる。広大な自然空間を前に、詩人が歌い始めるような印象である。

Ô ciel, ô mer, ô terre, ô Dieu pere commun<sup>11)</sup>

(天よ、海よ、地よ、共通の父なる神よ)

さらに「共通の父なる神」はキリスト教徒だけの神ではないのだ。ユダヤ人やトルコ人の神でもあって、さらには各自に共通の「父」であると続き、詩行で説明される。この共通の父は、

Qui nourris aussi bien par ta bonté publique / Ceux du Pole Antartique  
que ceux du Pole Arctique<sup>12)</sup>:

(南極の民も北極の民も、あなたの公的なご意志のおかげで／同様に豊かに養われている:)

宗教を超えたような神への呼びかけは、地球規模で人々を巻き込む。ルネ

サンス時代の地理学的な進歩もあるのだろうが、北極、南極を的確に指示して地球を意識させる。そして「共通」とか「公的（公共）」とか「同様」の言葉が現れ、「全ての人に平等に」となる。

Qui donnez et raison et vie et mouvement/Sans respect de personne à  
tous également,<sup>13)</sup>

(誰かを重んじることなく全ての人に平等に、理性と生命と動きを与えてくれる。)

冒頭で描かれたのは、地球規模（グローバル）で、平等な（差別のない）扱いを受けるはずの人間像である。この作品を収録する20世紀の版（ローモニエ版）は、Sans respect de personne の読解に注を付けている<sup>14)</sup>。まさに今日的な思考に合致するかのようである。

最初の呼びかけの後に、800行を超える詩行が続き、呼びかける対象はどんどん変わっていく。

「共通の父なる神」と同一だと考えられる「主 (Seigneur)」あるいは「至上の創造主」への呼びかけは、数十行続く。詩人は、この「主」に人間を懲らしめるようにと力説する。それは、まるで主なる神を挑発するような勢いである。

Dequoy te sert là haut la foudre et le tonnerre,/Si d'unesclat de feu tu  
n'enbrusles la terre?<sup>15)</sup>

(もしあなたが、火の爆発で大地を砕かれないなら、／雷鳴や稲妻は、あなたにとって何の役に立つのか。)

ついには自分の怒りを神にぶつける形を取りながら、詩人は神に問いた

だす。

Qui font trouver ton Fils imposteur et menteur/Ne les puniras-tu  
souverain createur?

/Tiendras tu leur party? Veux-tu que l'ont'appelle/Le Seigneur des  
larrons et le Dieu de querelle?<sup>16)</sup>

(あなたの御子を詐欺師や嘘つきとみなす人たち、／彼らを罰しないのか、／至上の創造主よ、／彼らの派閥に与するつもりか。／あなたはわれわれに、あなたを盗賊の主、／争いの神と呼ばせたいと思っているのか。)

Voyant la Chrestienté n'estre plus que risée,/J'auroishonte d'avoirla  
teste baptisée,/

Je me repentirois d'avoiresté Chrestien,/Et comme les premiers je  
deviendrois payen./La nuit j'adorerois les rayons de la lune,/Au matin  
le Soleil, la lumiere commune,<sup>17)</sup>

(キリスト教がもはや笑いものにすぎないのを見て、／わたしの頭に洗礼を受けさせ、／わたしはキリスト教徒であったことを悔い改め、／昔の者たちのように異教徒になるかもしれない。／夜には月の光を慕い、／朝には共通の光である太陽を慕うように、)

異教徒の世界や異教の神々、とりわけギリシア、ローマの神々を魅力的に描くのは、この詩人の得意とする所であるが、キリストの神にも、時折、古代の神々の性質を纏わすことを躊躇しない。

呼びかけには、2人称 (tu) の動詞が使われ、最初の100行ほどは、相手は神である。神は祈りの対象というよりも、対話相手になる。聖職者でもある宮廷詩人は、さらに神を攻め立てる様は上記の引用からわかるが、別

の場所では、神に注進するように歌う。

Tu as dit simplement d'un parler net et franc,/Prenant le pain et vin,  
C'estcy mon corps et sang,/Non signe de mon corps. Toutesfois ces  
ministres,/Ces nouveaux defroqués, apostats et belistres,/Dementent  
ton parler, disent que tu resvois,/Et que tu n'entendois cela que tu  
disois.<sup>18)</sup>

(あなたは単純に、はっきりと率直な声で言った、／パンとぶどう酒を取り、これは私の体と血であり、私の体のしるしではない、と。／しかし、あの牧師たちや新しい離反者たち、背教者たち、不信心者たちは、あなたの言葉を否定し、あなたは幻を見ているのだと言い、／あなたは自分の言っていることが分かってなかった、と言う。)

上記の詩行は、聖体拝領は記念的で象徴的な儀式に過ぎないとするカルヴァン派のテオドール・ド・ベーズと、聖体拝領には転成によってキリストの体が本当に含まれるとするカトリックを支持するロレーヌ枢機卿シャルルとの間の討論会（1561年12月9日と16日の会議）を踏まえていると言われる<sup>19)</sup>。パンとぶどう酒に対する捉え方は、派閥によって異なった。当然だが、ロンサールは、聖体においてキリストの「真の存在」を信じなかったカルヴァンへ反論するカトリックに、加勢する。実際の論争を「ルモンフランス」に取り入れ、そのまま神に報告（告げ口）する体裁である。こうした言説が神をも穿つほどに的確に神を言い表しているのかどうかは不明であるが、ロンサールは、実際、神をも恐れない表現を多用する。

Tu peux communiquer ton corps en divers lieux./Tu serois impuissant,  
si tu n'avois puissance/D'accomplir tout cela que ta majestee pense.<sup>20)</sup>

(あなたは様々な場所にあなたの体を移動させ分け与えることができる。／もしあなたの威厳が思う全てを成しとげる能力がないなら、あなたが無能なのだろう。)

ロンサールの神への報告は、固有名詞を明記し、批判する。茶化しているわけではないのだろうが、ロンサールの描写や語りは時に笑いを誘う。

Je n'aime point ces mots qui sont finis en os, / Ces Gots, ces Aistregots, Visgots, & Huguenots / Ils me sont odieux comme pest, & je pense / Qu'ils sont prodigieux au Roy & à la France.<sup>21)</sup>

(わたしはオーで終わるあの単語が少しも好きでない／ゴート族、東ゴート族、西ゴート族そしてユグノーだ。わたしにはベストのように醜悪だ。王にとってもフランスにとっても脅威だと考える。)

ユグノーの標的は具体的に記される。ユグノーに転じるのは「無垢な庶民 (vulgaire innocent)」, 「大衆 (grosse masse de plomb)」, 「着飾った貴族」, 「道を外れた学生」, 「単純な女性」, 「ちょっと知識がある人たち」などと言う。「民 (peuple) へのルモントランス」の表題の示す宛先人「民 (peuple)」は、むしろユグノーに転じやすい人々の集合体である。ここでは、民 (peuple) への注意喚起のルモントランスである。

「カルヴァン」さらに「ルター」も登場する。マルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) に対しては、「意見 (Opinion)」という怪物が、ルター目がけて毒蛇を投げたのが原因だと言う。毒蛇に巣喰われたルターは、その毒のおかげで奮い立ち、毒と激怒の嵐をザクセン地方に広めたとロンサールは歌う。興味深いことに「意見 (Opinion)」という怪物の発言が、直接話法で数十行にわたって展開されている。要約すれば、「ドイツ兵を喜ばせて

やれ、まず教会を打ち破れ。説教段に上がり、名前を広め、教皇を忌み嫌い、多くの術策を弄して教会に反対し、その富を略奪せよ」というのがこの怪物の命令である。その結果「ドイツは恐れおののき、スペインは震え出し、フランスは安眠できず、イタリアは驚愕し、イギリスの岸は……」という具合に、擬人化された表現が続く。アレゴリーに満ちた絵画を連想させるかもしれない。時代を経た読者は、笑いに誘われると言っても過言ではない。ロンサールの使う表現は一様ではなく変化に富む。ただしルターの生没年から考えると、ロンサールの活動時期とは重ならない。そのためかもしれないが、ルターを直接攻撃するのではなく、ルターを動かした怪物や毒物について言及する。ルターの時代と重なるエラスムスがスイスでルターに敵対しながらも寛容な言動を繰り返していたことを思いださせる<sup>22)</sup>。

ロンサールの歌う現状は、様々な異端が生まれ、教会が権力を失い、王の権威は揺らぎ、弱者は強者に食われ、世界は不安に満ち不審と不実に溢れ、古の掟は失われる時代である。ロンサールの表現の多くには、当時実際に起きた事件が見え隠れしていることは、頻繁に指摘されるが、それでも戦争の有様を記す詩人の詩句には、時代を超えて戦争の悲惨さを伝えてくれる力があるように思う。

詩人は、対話者の神に、戦争の結末を委ね、やっと祈りらしい表現が出る。「民 (people)」のための祈りである。

Et pource, Seogneur Dieu, ne punis en ton ire/Ton peuple repentant,  
qui lamente & souspire,<sup>23)</sup>

(それゆえ、神よ、罪を悔いている民を、神の怒りで罰しないでください、)

神に続く2人称の相手は、王侯たちである。呼びかけはまず王侯に向け

られる。

Vostre facilité qui vendoit les offices,/ Qui donnoit aux premiers les  
vaquans benefices?/ Qui l'Eglise de Dieu d'ignorans farcissoit,/ Qui de  
larrons privez les Pallais remplissoit,/ Est cause de ce mal.<sup>24)</sup>

(官職を売り、空位の聖職禄を与え、／神の教会に無知な者を送り、／裁判所を  
泥棒の成金で満たした／あなた方の安易さが、この不幸の原因です。)

さらに呼びかけは、王妃メディススに向かう。「王妃よ」と繰り返し、貪  
欲な取り巻きを遠ざけるように勧める。

続いて「学識高い、高位聖職者たちよ」と呼びかけ、彼ら自身の改革を  
求める。ロンサルが熟知する階級の話だからかもしれないが、この件は  
かなり具体的である。「宮廷と王の突然の寵愛を避けなさい。輝いたかと思  
えば、燃え尽きる、火のついたわらよりすぐに消えます」と「忠告」す  
る<sup>25)</sup>。

裁判官にも向かう。「王の世紀を司る、裁判官よ」と呼びかけ、

Vous, Juges des cités, qui d'une main egalle/Devriés administrer la  
justice royalle,/…/Il faut sans avoir peur des Princes ny des Roys,/  
Tenir droit la ballance, & ne trahir les loix/De Dieu,<sup>26)</sup>

(都市の裁判官たちよ、公平な手でもって、／王の正義を行使すべきです／(…  
中略…)／王侯への恐れを持たず、／天秤をまっすぐに保ち、神の掟を裏切っ  
てはいけません、)

次に「貴族たちよ」と呼びかけ、国と王に仕えるように要請する。貴族



たちへは、50行以上にわたる注意事項である<sup>27)</sup>。

そして「民 (peuple)」に呼びかける。

Vous peuple, qui du coultre, & de beufs accouplés/Fendés la terre  
grasse, & y semés des bleds,<sup>28)</sup>

(鋤をつけた牛で、肥沃な大地を耕し、麦を撒く、あなたがた民よ、)

農民たちのあとは商人たちに呼びかける

Vous Marchans, qui allés les uns sur la marine,/les autre sur la terre,<sup>29)</sup>

(海路や陸路を行く商人たちよ、)

ただ農民と商人には、「ルターのセクトも信仰も吸い込まなかった」という条件付きで、「今度は王の善良な奉仕者として振る舞うようにしなさい」という注意だけを詩人は与えた。農民や商人への呼びかけがほんの数行しかないのは、宮廷詩人という立場の限界なのだろうか。それはともかく、詩人が得意とする詩神ミューズたちに呼びかけが、次に続く。

Et vous sacré troupeau, sacrés mignons des Muses,<sup>30)</sup>

(神聖なグループ、神聖な可愛いミューズたちよ、)

ミューズたちへは、同時代の若い王子の紛争を記すように、という指令が出る。紛争に対してはアポロンだけでなくミューズたちも武装を命令される。神話の神々にもロンサールは頼りつつルモントランスを進める。

同業に近い、友人バスカルに呼びかける。

Toy Paschal, qui asa fait un œuvre si divin,<sup>31)</sup>

(なんと神聖なる作品を作った、君、パスカルよ、)

死を恐れて出版を躊躇する友人に、ロンサールはその出版を激奨する。ロンサール自身も残酷で非人間的な輩から小銃で5発撃たれたが、神のおかげで生きているという逸話が語られる。命がけの出版であるが、ロンサールは「死に関しては、覚悟はできている」と断言する<sup>32)</sup>。「真理を書くこと、真理を愛し、真理を説きそれを語ることを控えるくらいなら死ぬほうがまし」であるし、ユグノーが大手を振ってのさばっているのを見るのは、ロンサールにとって死に等しいようである。周囲の人間がどんどんユグノーになっていくのを、ロンサールは耐えられない気持ちで書き綴る。またユグノーに刃向かって物を書くことのリスクも熟知しているように語る。ロンサールが書いているこの『ルモントランス』が、彼らに与える反応さえ、それも最悪のシナリオを予め想像し『ルモントランス』に記す、「私は準備万端、勇気を失うことはない」と<sup>33)</sup>。

続く呼びかけは「フランスの血を引く高貴な王子よ」「ブルボンの殿の不屈の血を継ぐ善良な王子よ」と変化し、ユグノーの術作に惑わされないように注意喚起を重ねる<sup>34)</sup>。

言葉が激しさをますと、詩人はずいに「ああ、王子よ、承知しております、大部分の司祭は何の価値もないが、神の教会は神聖にして真実」と辛辣な言い回しも取る<sup>35)</sup>。そして「目を開いてください、高潔な王子よ」と注意し、王子が新教に与するのを止めようと説得を繰り返す。詩人の言説は続く<sup>36)</sup>。さらに「この詩を読んで怒らないでください」と願うロンサールは「あなたの臣下としてのつとめ」を果たしていることを王子にも確認させるかのようである<sup>37)</sup>。

ルモントランス（忠告）は王子から王子の取り巻きにも向かう。彼らは

「おお、愚かなる野蛮人よ」と呼びかけられる<sup>38)</sup>。ロンサールの友人で高等法院の判事サパンが、彼らの犠牲となったことも言及される。サパンへは「おお、最も幸せなサパンよ、信仰の真の殉教者よ」と呼びかけた<sup>39)</sup>。

再び王子に対して、ロンサールは未来を託す呼びかけを続け、戦争の終結を願う。

Ha Prince, c'est assés, c'est assés guerroyé,/(…)/La mort des  
jouvenceaux, la complainte des femmes,/Et le cry des vieillards qui  
tiennent embrassés/En leurs tremblantes mains leurs enfans  
trespassés,/Et du peuple mangé les souspirs & les larmes,/Vous  
devroyent emouvoir à mettre bas les armes.<sup>40)</sup>

(ああ王子よ、もうたくさん、戦いはいやです。(…中略…) 若者たちの死、女  
たち嘆き、／震える手で死んだ子供たちを抱き抱える老人たちの叫び声、／略奪  
された民衆のため息と涙が、あなたはすぐに武器を捨てるべきです。)

親交のあった貴族にも呼びかける「モンモランシー、フランスの啓明な  
ネストールよ」<sup>41)</sup>。

領主たちに対しても「思い出せ、領主たちよ」と語りかける<sup>42)</sup>。

さらに「確固たる戦士たちよ、歩兵よ、兵士よ」「堂々たる軍隊よ」と続  
き、軍隊を鼓舞する訓示のような調子にルモントランスは進んでいく<sup>43)</sup>。  
「恐れるな、ドイツ軍を」「恐れるな、牧師たちの攻撃を」<sup>44)</sup>。

ロンサールは兵士たちに言う、

Vous ne combattés pas (soldars) comme autresfois/Pour borner plus  
avant l'Empire de vos Roys,/C'est pour l'honneur de Dieu, & sa querelle

sainte,<sup>45)</sup>

(君たち(兵士たち)は昔のように／主君の帝国拡大のために戦うのではなく  
／神の名誉と、神の聖戦のためである、)

そして神のために武器を取る兵士から、詩人の視線は神に向かう。「至高の神よ」とルモントランスの最後の呼びかけをするが、その願いは過激で、まるで軍神に願うかのようなのである。

Que l'auteur de ces maux au combat ne perisse,/Ayant le corcelet  
d'outre en outre enfoncé/D'une picque ou d'un plomb fatalement  
poussé.<sup>46)</sup>

(どうぞ、胴鎧に致命傷となる槍あるいは鉛玉が致命的にぶち込まれて、／この不幸の首謀者が滅びますように。)

ロンサールの表現は、呼びかける相手によって変わるので、上記の言葉は軍隊のための神への依頼と考えれば、その過激さにも納得がいくかもしれない。

美しい最後の5行に向かおう。

Qui s'assure en ton nom, franche de servitude,/De fleurs bien  
couronnée, à haute voix, Seigneur,/Tout à l'entour des morts celebre  
ton honneur,<sup>47)</sup>

(あなたの名を信じる人は隷属を解かれ、／花冠を戴いて、声高らかに、主よ、  
／死者に取り囲まれて、あなたの名誉を讃える、)

まるで殉教者たちの昇天の絵画をみるような描写である。

Et d'un cantique saint chanté de race en race / Aux peuples avenir tes  
vertus & ta grace.<sup>48)</sup>

(聖歌を清らかに歌い、民から民へ、／未来の民にあなたの徳と恩寵を讃える。)

『ルモントランス』はこれで終わるのだが、ここで冒頭の1行にもう一度目を向ける。「天よ、海よ、地よ、共通の父なる神よ (Ô ciel, ô mer, ô terre, ô Dieu pere commun)」という、呼びかけで始まるのは見てきた通りだが、800行を超える長詩がこの1行に託されている感じがある。あえて言えばこの詩の全体を要約していると感じられるかもしれない。

「天」への呼びかけは、後に登場する天使やミューズへの呼びかけにつながり、「海」への呼びかけは、商人の海路選択に難破のイメージを喚起する。「地」への呼びかけは、土地の状態や後半に現れる農具を使った農業従事者へ通じる。そして大文字の「神 (Dieu)」こそが、ロンサールの宗教的立場(旧教カトリック)や宗教的役職(教会参事)とも一致する。

この最初の1行は、異教的な神話への連想から、キリスト教の神への視点の移動も感じさせる。詩人は通常のルモントランスのように、目的にダイレクトに挑むことはしない。自分の関心事を無理なく吐露し(途中で現れる神話の神々の名)、加えて課せられた仕事の務めを果たすべき宮廷詩人の義務(王子への自分の立場の確認)が、この1行目に凝縮されていると考えることもできる。一つの読書である。

『ルモントランス』の全体をたどり終わると、作品の表題が示す「民へのルモントランス」の「民 (people) は、神々(キリスト教の主、詩神ミューズ等)や人々(王侯、王子、貴族、庶民、商人など)に向けたルモントランス(注意喚起)という結果になる。それとも『フランスの民 (people) へのルモン

トランス』は、フランスに関わる人や事物へのルモントランスと広義で考えるべきなのか。抽象的な「フランス」を政治的・地理的概念で統一している題名だと、簡単にまとめてしまうこともできるかもしれない。いずれにしても今日の私たちが考える民 (people) とは、かなり乖離する。

しかし、ルモントランスを作品の一つのジャンルとして考えれば、「民 (people) へ記した作品」あるいは「民のための作品」と捉えることができる。実際にみたように、この詩の中で使用された民 (people) という言葉は、農民たちや商人たち、庶民たちを示す言葉として使われている。

いずれにしても詩の韻律やレトリックの卓越さ修辞学的な質の高さは、何度も出版される耐久性のある詩作品であることを確約するかのようである。未来においても人々に寄与できるはずだという詩人の自信の表明が同時代的なルモントランスを題名に冠した理由なのだろうか。結論をここで簡単に出すのは難しいが、ロンサールが「ルモントランス」というタイトルを選んだ利点は、1561年から1563年の時代背景（宗教戦争）に対する時事慷慨を詩人として十分に発揮できたということだろう。テキストの内容は興味深く、辿ってきた幾つもの「呼びかけ」、2人称の使用を通して、呼びかける相手によって同じようなトピックでも違う見解を提示するような場合も散見された。『ルモントランス』でロンサールは「対話」の可能性を広げた。『ルモントランス』で名指しされた人々に、独自の問いかけと説得を行い、相手にも「対話」を続ける可能性を与えたのである。今回はこまめで当座のまとめとしたい。

## おわりに

文学は、過去において「ルモントランス」という用語に、修辞的なあるいはジャンルとしての機能をもたせなかった。しかし、今後はその用語がある程度明確なジャンルを指すようになる可能性はあると考えられる。本

稿で扱ったロンサールの『ルモントランス』には、「感情的な言葉と公的な和解」の結びつきがある程度確認できたのではないだろうか。ロンサールがこのようなタイトルを選んだ理由を明確に記すことはできなかったが、おそらく当時の文書的な諫言の役割とルモントランスの特性（助言、友情、解決、和解など）がもつ可能性を展開したいという修辭的な希望もあったのではないだろうかと推測する。さらに詳細な研究が必要とされることは自明である。

注

- 1) ピエール・ド・ロンサールの『フランスの民へのルモントランス (*La Remontrance au peuple de France*)』については、以下の版を参照した。
  - les Œuvres complètes II, éd. par J. Céard, D. Ménageret M. Simonin, Paris, Pléiade, 1994, p. 1020-1039.
  - les Œuvres complètes XI. — *Discours des misères et autres pièces politiques* 1563, éd. P. Laumonier, Paris, Marcel Didier, 1946, p. 61-107.
- 2) Joseph Lecler, *Histoire de la tolérance au siècle de la Réforme*, Albin Michel, 1994, p. 555-673.
- 3) 固有名が明確な人物、漠然とした集団、ルモントランスには不釣り合いな荒唐無稽の存在等々が、対話の相手である。列举すれば、カトリーヌ・ド・メディシス王妃とフランス国王、異端のコンデ公とナバラ王アントワヌ・ド・ブルボン、歴史家ピエール・ド・パシャル、異端のコンデ公、その弟のナヴァール王アントワヌ・ド・ブルボン、アンヌ・ド・モンモランシ (1493-1562)、改革派から報復で絞首刑に処された評議員のサバン、貴族、領主たち、農民たち、商人たち、兵士たち、軍隊、さらに詩神のミューズたち、主なる神等々である。
- 4) 特に以下の著作をあげることができる。
  - *Les Remontrances (Europe, XVI<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle): textes et commentaires*. Sous la direction d'Ulrich Langer et Paul-Alexis Mellet. (Travaux du Centre d'études supérieures de la Renaissance, 8.), Paris, Garnier, 2021.
  - Paul-Alexis Mellet, *Les Remontrances. Discours de paix et de justice en temps de guerre. Une autre histoire des guerres de religion (France, v. 1557-v. 1603)*,

Genève: Droz, 2022. 568 p.

- 5) 以下の表題。Ullrich Langer et Paul-Alexis Mellet, «Introduction Les remontrances, un genre de discours entre reproche et conseil amical (XVI-XVIII siècle)» dans *Les Remontrances*, 2021.
- 6) 日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』白水社 1974年。
- 7) 「時事慷慨詩」については、今日は「論争詩」や「ディスクール」と呼ばれることが多い。
- 8) 図版: les Œuvres complètes XI. — *Discours des misères et autres pièces politiques* 1563, éd. P. Laumonier, Paris, Marcel Didier, 1946, 以下では Lm. と略記。p. 61.
- 9) Yvonne Belleanger, *La Pléiade*, Puf, 1978, p. 85-87. (イヴォンヌ・ベランジェ (高田, 伊藤訳)『プレイヤー派の詩人たち』白水社 1980年)
- 10) 相田淑子「フランス・ルネサンス詩人ロンサールの霊鬼」, 渡邊浩司編『幻想的存在の東西—古代から現代まで—』中央大学出版部 2024年, 277-308頁。
- 11) 作品の引用は全て Lm. による。Lm. p. 61-107. 日本語訳は私訳であるが、以下を参考とした。ピエール・ド・ロンサール (高田勇訳)『ロンサール詩集』青土社 1985年。
- 12) Lm. v. 3-4.
- 13) Lm. v. 5-6.
- 14) 「個人を人種, 出自, 生まれつきの質で, 考慮しないこと」(Lm. p. 63)。
- 15) Lm. v. 11-12.
- 16) Lm. v. 33-36.
- 17) Lm. v. 59-64.
- 18) Lm. v. 113-118.
- 19) Lm. p. 69, note 2.
- 20) Lm. v. 134-146.
- 21) Lm. v. 217-220.
- 22) Joseph Lecler, *Histoire de la tolérance au siècle de la Réforme*, p. 133-149.
- 23) Lm. v. 371.
- 24) Lm. v. 379-383.
- 25) Lm. v. 439-442.
- 26) Lm. v. 452-453 et v. 461-463.
- 27) Lm. v. 470-520.
- 28) Lm. v. 521-522.
- 29) Lm. v. 524-524.



- 30) Lm. v. 527.
- 31) Lm. v. 533.
- 32) Lm. v. 541.
- 33) Lm. v. 599
- 34) Lm. v. 611 et 622.
- 35) Lm. v. 681-684.
- 36) Lm. v. 699.
- 37) Lm. v. 704-707.
- 38) Lm. v. 712.
- 39) Lm. v. 726.
- 40) Lm. v. 745 et v. 752-756.
- 41) Lm. v. 764.
- 42) Lm. v. 777.
- 43) Lm. v. 785-799.
- 44) Lm. v. 791 et v. 800.
- 45) Lm. v. 809-811.
- 46) Lm. v. 832-834.
- 47) Lm. v. 840-841.
- 48) Lm. v. 843-844.

